

『二葉集』出典考

— 編集過程の一端をたどる —

松澤正樹

一、はじめに

『二葉集』は、それまでの俳諧の方面では珍しい付合のみを扱った撰集『物種集』（延宝六年十一月序）の追加として、一年後の延宝七年十一月に出版された。本稿は、この俳諧付合集の出典を追跡し、そこから見えてくる編集上の問題を考え、本書出来までの過程の一端をたどろうとする試論である。

まず本書の出典について、延宝期に出版された俳書を中心に調査した結果から挙げると、次のとおりである。

連句集から 144組
俳諧撰集から 64組 合計208組

『二葉集』所収の付合合計1000組のうち、175組の付合は本書の撰集にあたる『物種集』にすでに見られるものであり、これ以外の825組が『二葉集』編集にあたり新たに撰ばれたことになるが、出典となる連句が判明したのは、現時点で新撰付合の二割弱にあた

る。表1にその出典を一覧で示した。

二、『二葉集』所収付合の出典—『宗因千句』—

表1の凡例にあるとおり、出典が判明したなかで最も多く採用されているのは『宗因千句』であり、宗因の付合63組の半数近く（『物種集』既出の11組を除いた新撰52組の半数以上）はこの書に拠っている。本書は、宗因の万治三年以前から寛文十年以前までの独吟百韻十巻を一冊にまとめたものである。言うまでもなく宗因の連句作品は延宝期に入ってからも少なくなく、材料はいくらでもあったわけだから、何も『宗因千句』の旧作を取り上げなくてもよかつたはずである。また、新撰の半数以上を十年以上も前の作に求めることは、『二葉集』の内題「俳諧新付合千与」や原題簽角書に記された「俳諧新付合／物種追加」にもそぐわない処置だとも言えよう。

江本裕氏は、「西鶴—二葉集の場合—」（『大妻国文』18号・昭

【表一】『二葉集』出典一覽（連句の部）

〔凡例〕この表は、『近世文学資料類従・古俳書編』（第二期・勉誠社刊）、『天理図書館綿屋文庫俳書集成』（八木書店刊）などの影印本、『古典俳文学大系 3・4』（集英社刊）などの翻刻本、および天理図書館綿屋文庫・東京大学総合図書館連歌俳諧書・柿衛文庫の各マイクロフィルムを使用した調査により、『二葉集』所収付合の内、出典の連句が確認された144組の付合の出典資料名および出典箇所の一覧である。

- 一、「No」は便宜上つけた通し番号である。先頭の「△」は、その付合が『物種集』に既に見られるものであることを示す。
 一、「箇所」は付合の『二葉集』における記載箇所であり、原本の丁付に従ったため付合の本文は「2」から始まる（「1」は序文）。
 一、「出典」は略称を用いた。正式書名（通称）と刊年は以下のとおりである。

なお、配列は『二葉集』所収の付合組数の多い順とし、△△内に組数を示した。

- 宗因千句 宗因千句（延宝元年頃刊）△29▽
 ○草枕 草枕（延宝四年刊）△18▽
 ○坂三吟 大坂三吟（延宝六年頃刊）△16▽
 ○虎溪橋 虎溪の橋（延宝六年刊）△7▽
 ○難波風 難波風（延宝六年八月刊）△5▽
 ○珍重集 珍重集（延宝六年秋頃刊）△3▽
 ○五徳 五徳（延宝六年刊）△2▽
 ○三鉄輪 三鉄輪（延宝六年刊）△1▽
 ○見花数 見花数寄（延宝七年四月刊）△1▽
 ○大硯 大硯（延宝六年秋以降刊）△20▽
 ○西鶴五 西鶴五百韻（延宝七年三月刊）△18▽
 ○籠拔 当流籠拔（延宝六年十一月刊）△9▽
 ○桜千句 桜千句（延宝六年五月刊）△6▽
 ○道頓堀 道頓堀座懐紙△4▽ ※
 ○宗七百 宗因七百韻（延宝五年頃刊）△2▽
 ○句箱 句箱（延宝七年八月刊）△2▽
 ○仮舞台 仮舞台（延宝七年三月刊）△1▽

※『道頓堀花みち』（延宝七年十一月刊）に「道頓堀座懐紙之内付合」として掲出されたもの。

- 一、右のほか、『続境海草』（寛文十年刊）、『千宜理記』（延宝三年刊）、『誹諧屋網』（延宝六年刊）所収の付合と一致するものが見られ、『二葉集』がこれら三書からそのまま採用した確証はないので、一覽にしなかつた。また、守武の付合は『守武千句』追加百韻に見られ（前旨の異同大）、宗鑑の付合は『犬筑波集』に見られた（刊本『新撰犬筑波集』になし）が、両者については特定の俳書によつたと必ずしも言えないため、これらも一覽に載せなかつた。

- 一、「典箇所」の先頭の数字は、出典中の連句が何巻目であるかを示したものの、「第一」「第二」などの記載がないものは、その配列の順番を数字に置き換えた。二つめは折、三つめはその表（オ）か裏（ウ）かを示す。最後は付合がその面の何句目であるかを示す。

- 一、参考に、出典の連句から判明する前句の作者を「前」の欄に挙げた。
 一、個別の注を表の後に挙げた。注は表中の「No」に対応させてある。

No.	簡所	付作者	出典	典簡所	前
1	2ウ	西海	大硯	5初ウ9	由平
2	〃	由平	大硯	5初ウ2	西海
3	〃	元順	大硯	3初ウ8	西海
4	〃	益翁	大硯	4名ウ4	西海
5	3ウ	季吟	宗因千	6三ウ4	湖春
6	4才	西鶴	草枕	3初ウ3	西鶴
7	〃	西鶴	草枕	3初ウ6	旨恕
8	8ウ	如貞	草枕	4初ウ6	旨恕
9	9才	旨恕	草枕	4名ウ2	意朔
10	〃	信章	草枕	7初才6	旨恕
11	9ウ	西翁	宗因千	7三ウ11	西翁
12	10才	西翁	見花数	8名才6	惟中
13	10ウ	西翁	西鶴五	4名ウ1	西花
14	12才	西翁	西鶴五	5名才6	西翁
15	15ウ	西鶴	西鶴五	5名ウ3	西翁
16	16才	西鶴	西鶴五	3初ウ2	西鶴
17	17才	松意	虎溪橋	3才ウ5	定俊
18	19ウ	西鶴	虎溪橋	4二才3	西翁
19	20ウ	梅翁	宗因千	2名ウ4	西鶴
20	〃	松意	虎溪橋	1初ウ13	西翁
21	21ウ	宗旦	籠坂	4三才8	西花
22	〃	西六	西鶴五	7名才12	旨恕
23	22才	信章	草枕	8名才3	旨恕
24	〃	江雲	虎溪橋	1初ウ10	松意
25	〃	桃雲	飯舞台	?二ウ1	信德
26	〃	西鶴	虎溪橋	2三才11	松意
27	22ウ	鉄幽	籠坂	1三才5	鬼貫
28	〃	鉄幽	籠坂		

No.	簡所	付作者	出典	典簡所	前
29	23才	梅翁	宗因千	2二才2	西翁
30	23ウ	梅翁	宗因千	9名才3	西翁
31	25才	百丸	籠坂	2二ウ4	宗旦
32	〃	梅翁	宗因千	3二ウ8	西翁
33	25ウ	本秋	草枕	5初ウ2	夫連
34	26才	梅翁	難波風	4初ウ7	次末
35	26ウ	鉄幽	籠坂	4二ウ2	宗旦
36	〃	西鶴	西鶴五	4三ウ5	西六
37	〃	旨恕	草枕	4名才8	意朔
38	27才	梅翁	宗因千	6三才2	西翁
39	27ウ	西友	西鶴五	4三ウ7	西吟
40	29ウ	西鶴	虎溪橋	1初才9	江雲
41	〃	西花	西鶴五	5二才7	西吟
42	30ウ	西友	西鶴五	4三ウ12	西鶴
43	31才	梅翁	宗因千	5三才6	西翁
44	31ウ	梅翁	宗因千	7初ウ6	西翁
45	32ウ	梅翁	宗因千	7初ウ10	西翁
46	33才	百丸	籠坂	5初ウ8	木兵
47	33ウ	梅翁	宗因千	8二才3	西翁
48	34才	鬼貫	籠坂	5二ウ12	百丸
49	34ウ	梅翁	五徳	1名才6	西鬼
50	34ウ	木兵	籠坂	1初ウ4	宗旦
51	35才	鉄幽	籠坂	5初ウ1	宗旦
52	35ウ	梅翁	宗因千	8名才5	西翁
53	36才	宗旦	籠坂	2三ウ7	鉄幽
54	36ウ	梅翁	五徳	1三ウ10	次末
55	〃	如昔	桜千句	5初ウ5	西鶴
56	37ウ	梅翁	宗因千	9三才7	西翁

No.	簡所	付作者	出典	典簡所	前
57	〃	素敬	桜千句	2名才5	友雪
58	38才	江雲	虎溪橋	1初ウ7	松意
59	38ウ	梅翁	宗因千	9名ウ4	西翁
60	〃	西花	西鶴五	3二ウ13	西友
61	39ウ	梅翁	宗因千	2二ウ13	西翁
62	〃	西鶴	西鶴五	5名才9	西吟
63	〃	西鶴	西鶴五	3名才9	西吟
64	40ウ	梅翁	宗因千	10二ウ4	西翁
65	41才	西花	西鶴五	1三ウ4	西吟
66	41ウ	西友	西鶴五	1三ウ10	西花
67	〃	友雪	道頓堀	?	?
68	42才	西六	西鶴五	2二才9	西友
69	43才	西六	西鶴五	2初ウ10	西吟
70	〃	西六	西鶴五	4二才6	西花
71	43ウ	西吟	西鶴五	2初才2	西六
72	44才	西花	西鶴五	2二才12	西鶴
73	〃	次末	難波風	4初ウ14	旨恕
74	44ウ	西鶴	桜千句	7三ウ3	以仙
75	45才	次末	難波風	2名才14	西六
76	46才	西吟	西鶴五	3三ウ7	益翁
77	〃	西秋	桜千句	6初ウ9	西翁
78	46ウ	梅翁	宗因千	5初ウ4	梅翁
79	47ウ	元順	宗七百	3名才7	弘氏
80	〃	梅翁	宗七百	4三才7	以仙
81	51才	次末	難波風	5三ウ13	西翁
82	52才	梅翁	宗因千	6名才7	西翁
83	55ウ	梅翁	宗因千	2初ウ1	西翁
84	56ウ	梅翁	宗因千		

No.	箇所	付作者	出典	典箇所	前
85	7ウ	梅翁	宗因千	7名ウ7	西翁
86	58ウ	梅翁	宗因千	2三ウ13	西翁
87	59ウ	梅翁	宗因千	8名才11	西翁
88	61ウ	梅翁	宗因千	10初ウ7	西翁
89	62ウ	梅翁	宗因千	4三才9	西翁
90	63才	梅翁	宗因千	4二才11	西翁
91	64ウ	梅翁	宗因千	5二ウ3	西翁
92	67ウ	梅翁	宗因千	8二ウ6	西翁
93	67ウ	建寿	道頓堀	?	?
94	68才	任口	大硯	2初ウ4	西海
95	元順	元順	大硯	3初才3	元順
96	由平	由平	大硯	5名才11	西海
97	西海	西海	大硯	6初ウ4	三ヶ
98	益翁	益翁	大硯	4初ウ10	三ヶ
99	69才	三ヶ	大硯	6初ウ11	三ヶ
100	西長	道頓堀	道頓堀	?	?
101	69才	旨恕	大硯	8名才4	旨恕
102	西鶴	西鶴	大硯	10初ウ8	西海
103	高政	高政	大硯	9初才6	西海
104	70ウ	高政	大硯	9名才4	高政

No.	箇所	付作者	出典	典箇所	前
105	元順	元順	大硯	3名ウ4	西海
106	西鶴	西鶴	大硯	10初ウ5	西鶴
107	71才	公木	大硯	1初ウ7	素敬
108	71才	西秋	坂三吟	2三ウ1	由平
109	72才	益翁	坂千句	4初ウ6	西海
110	72才	如見	大硯	7名ウ4	如見
111	72才	西鶴	大硯	3初ウ8	均朋
112	72才	元順	大硯	1三才5	西海
113	72才	西順	大硯	3初ウ7	西海
114	73才	素敬	大硯	3初ウ5	西海
115	73才	益友	坂三吟	1初ウ9	益友
116	73才	素敬	坂三吟	1二ウ10	公木
117	75ウ	益友	坂三吟	1三才3	公木
118	75ウ	素敬	坂三吟	2二ウ2	公木
119	76才	如貞	草枕	2三才8	公木
120	76才	公木	草枕	4初才6	旨恕
121	76才	公木	草枕	2三才10	益翁
122	76才	季吟	草枕	5初才3	昌数
123	76才	公木	草枕	6名ウ1	湖春
124	77才	益友	坂三吟	2名ウ3	益友

No.	箇所	付作者	出典	典箇所	前
125	77才	素敬	坂三吟	2名ウ5	公木
126	78才	公木	坂三吟	3初ウ12	素敬
127	78才	意朔	草枕	4初ウ7	如貞
128	78ウ	公木	坂三吟	3二才1	素敬
129	79才	公木	坂三吟	3二才7	素敬
130	79ウ	素敬	坂三吟	3三才1	公木
131	80才	季吟	草枕	6初ウ4	湖春
132	80才	素敬	坂三吟	3三ウ8	公木
133	80ウ	親房	道頓堀	?	?
134	81才	素敬	坂三吟	3名ウ1	公木
135	82才	西鶴	三鉄輪	2二才7	西鶴
136	82才	生重	句箱	2	西鶴
137	82ウ	頓悦	句箱	3	西鶴
138	82ウ	旨恕	草枕	1初ウ1	旨恕
139	84才	梅翁	草枕	1名ウ3	梅翁
140	84才	旨恕	難波風	4二才4	次末
141	85才	元順	草枕	2初ウ3	元順
142	85才	石斎	珍重集	5二ウ5	梅翁
143	85才	江雲	珍重集	1初ウ6	梅翁
144	85才	梅翁	珍重集	2二才9	梅翁

注

(67)「はしの詰右の足より踏出して 建寿」の前句として掲出。
 (135)「典箇所」の「2」は、阿誰軒『誹諧書籍目録』にある「西翁 西鶴 西夕」の配列から仮に推定したもの。
 (136) (137) 抄出された西鶴の付句が前句と一致することから推定。

和62年3月)、および『西鶴事典』(おうふう・平成8年12月刊)の「二葉集」の項で、実質上の編者とされる西鶴が自らの付合を巻頭に挙げていること、またその巻頭付合の読解を通して、この時期の西鶴の「宗因離れ」と言う一つの仮説を試みている。他者と交わらない(独吟)、しかもひと昔前の作品から宗因の付合を多く取り上げた理由を考えると、江本氏の右の仮説が思い起こされるのだが、西鶴の宗因離れをどうしても納得できない現時点では、もつと別なところに理由を求めてみたくなる。

もしかすると、(宗因ならば『宗因千句』)と言ったような、本書を一種バイブル視する姿勢が、西鶴あるいは大坂談林のなかにあったのであろうか。しかし、それならばすでに『物種集』でも採用されていたはずであるが、実際は『宗因千句』からは1組の採用も見ない。ふたたび宗因の旧作『宗因千句』を取り上げなければならぬ何らかの事情が、『物種集』編集以降、延宝七年の談林俳壇にあったのかも知れず、そうなると内題や外題角書に唱う「新付合」の意味するところが、『物種集』の内題添書「俳諧新付合」と微妙にずれることになる。大きな問題をばらんでいるように思われるが、今は明らかなことは言えない。

さて、『宗因千句』に続いて多く採用されたものに、西海編『大硯』(20組)、旨愨編『草枕』(18組)、西鶴編『西鶴五百韻』(18組)がある。『西鶴五百韻』は、自らが手がけた連句集であるから、これだけ多くの付合が採用されるのは十分にうなずける。しかし、他の二書はどうか。とくに、『草枕』は現在伝わる上巻だ

だけでこの数である。これにもし所在不明の下巻を加えたならば、その採用付合数において『宗因千句』を上回っていたにちがいない。この二書が多く採用されたことには、本書編集上の理由が考えられるが、これについてはのちに詳しく述べる。

三、出典の分布状況(一)——その偏りと集中——

唐突のようではあるが、ここで、出典となった連句資料が『二葉集』ではどのように取り込まれて行ったか、そのいわゆる分布状況を見てみたい。

右に挙げた『宗因千句』の場合は、わりあい『二葉集』本文全体に散らばっている。しかし、これも細かく見ると、二十ウゝ二十五オ・卅一オゝ卅三ウ・卅七ウゝ四十ウの宗因作の各4組、五十五ウゝ六十四ウの宗因作9組は、立て続けに『宗因千句』を出典としている。また、『大硯』の場合、二ウでいきなり4名の付合を採用しているが、そのうち三オから六十七オまで『大硯』所収作者の付合が103組取り上げられているにもかかわらず、『大硯』を出典とする付合が1組も見られない。ところが、六十八オゝ六十九ウになると、『大硯』所収作者の付合9組がすべて『大硯』を出典としている。以下、西鶴の付合を『桜千句』から1組取っているもの、おおかたは『大硯』を出典とする付合が続き、七十三オ以降、『大硯』からの採用はぱったりと止まる。すなわち、それ以降の『大硯』所収作者の付合24組は、別な資料を出典とし

ているのである。ここに、出典資料の分布に偏りが見られる。

このような偏りが最も著しいのは、素敬・益友・公木による『大坂三吟』（以下『三吟』と略す）である。素敬は9組中1組（卅七ウ）が『桜千句』を出典とし、もう1組（卅九ウ）は出典不明だが『物種集』に既出。残りの7組が『三吟』からの採用である。また、益友は3組全部、公木も6組全部が『三吟』から採用されたものである。そして、これらはすべて七十三才より八十ウに集中し、その前後には見られない。

右のような出典資料の分布の偏りをどのように考えたらよいか。入集作者の撰定や資料収集や付合の抜き出しから、版下原稿作成を経て、印刷・出来までの間には、おそらく複雑な作業がからみあってくるのだと想像されるが、右の偏った分布は、その一端を示しているとは言えないだろうか。『大硯』がある範囲にまとまって出ていることや、『三吟』が後半になって集中して出ている背景には、付合や作者よりも素材としてのテキストが先行しているような気配さえ感じられる。単純に〈付合・作者撰定〉↓〈その付合抜き出し〉と言う手順とは逆に、付合の素材となる連句からの抜き出しが先に立ち、その流れに乗って入集することになったり、あるいは入集の数が増えた作者もいた、と仮定する余地も残されているのではないだろうか。

また、これらの出典資料の分布の偏りは、その編集作業が時間をかけてじっくり行われたものではなかったことを思わせる。

『二葉集』の出典資料の分布と比較するには最適かどうかわか

らないが、参考に蘭秀撰の発句・付句集『後撰犬筑波集』（延宝四年頃刊^カ）のなかから付合の出典分布を見てみよう。この撰集が収める付合は計419組で、現時点でその出典となる連句が確認できているのは101組、出典資料数は14作品にすぎないが、その分布状況を示すと表2のとおりであり、およその傾向はうかがえるかと思う。ここには、『二葉集』のような出典の集中や偏りが見られない。四季ごとの部立て編集と言う点で『二葉集』とは異なる編集姿勢にあり、同列に論じることがもちろんできないが、それだからこそ『後撰犬筑波集』の方では、元となる資料からの抜き出しを一度取りまとめ、これを適当な箇所に分け分けると言った一過程が必要だったのであり、逆に言うると部立てを取らない『二葉集』にはこの過程が時におろそかになることも予想されるのである。つまり、a 原資料の収集（入手）↓b 付合の抜き出し↓c 編集↓（d 版下元原稿の作成）↓e 版下原稿の作成と言った過程からcの部分の時には省いた可能性があると言いうことである⁵。

四、出典の分布状況（二）——『二葉集』後半部分——

抄出しが残っていないために2組の出典しか確認できない『句箱』を例に出すのは危険であるが、たとえばこの『句箱』は延宝七年八月に刊行されたものであり、元となった連句がいつごろの興行か判然としないものの、八月をさほど遡らないものと思われ、判明した出典資料のうちでは最も後のもの（出版時期に近いもの）

65	64	63	61	61	60	58	58	56	55	55	53	53	52	50	49	49	48	48	春	
ウ	オ	オ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	簡所
友我	弘氏	季徳	湖春	季吟	秀蘭	定清	信武	季吟	守武	蟻足	梅翁	信徳	玄札	弘氏	徳元	西全	素雲	諸国	付作者	
新統	新統	花千	十会	十会	新統	誹諧	信徳	十会	誹諧	新統	宗因	誹諧	誹諧	新統	新統	新統	諸国	諸国	出典	
独	独	十	集	集	独	独	独	独	独	独	独	独	独	独	独	独	独	独	独	

51	49	48	47	46	45	44	44	43	40	夏	67	66	66	66	66	66	66	66	66	簡所
オ	オ	ウ	オ	オ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	簡所
胤及	信徳	梅翁	季吟	弘氏	常矩	友我	信友	保友	季吟	季吟	信徳	梅翁	季吟	湖春	玫也	花千	花千	花千	塵塚	付作者
統独	信徳	蚊十	新統	諸国	新統	新統	信徳	統独	塵塚	十会	信徳	蚊十	花千	花千	塵塚	花千	花千	花千	塵塚	出典
吟	十	集	独	独	独	独	十	吟	集	集	十	十	句	句	句	句	句	句	句	句

63	62	61	61	60	59	58	57	56	55	55	54	54	53	51	50	秋	50	50	50	簡所
オ	ウ	ウ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	簡所
季吟	季吟	望三	信徳	胤及	湖春	正立	弘氏	立圃	立圃	正春	信徳	季吟	伊安	信徳	弘氏	梅翁	蚊柱	新統	付作者	
十会	廿会	新統	信徳	統独	花千	花千	新統	誹諧	誹諧	新統	信徳	花千	諸国	塵塚	新統	蚊柱	新統	新統	出典	
集	集	独	十	吟	十	十	独	独	独	独	十	句	独	十	独	独	独	独	独	

78	77	76	76	75	73	72	71	70	70	69	68	68	67	66	65	64	64	64	64	簡所
オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	簡所
季吟	季吟	悦春	湖春	梅翁	正徳	友仙	三昌	湖春	正立	幾音	常矩	貞頼	可頼	季吟	維舟	無氏	弘氏	信徳	守武	付作者
花千	花千	塵塚	大坂	誹諧	塵塚	紅梅	大坂	花千	花千	大坂	諸国	紅梅	花千	塵塚	新統	新統	信徳	誹諧	誹諧	出典
句	句	独	独	独	十	十	独	句	句	独	独	千	句	句	吟	独	十	独	独	独

61	60	55	55	54	53	53	52	冬	80	79	79	79	79	79	79	79	79	79	79	簡所
オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	簡所
意春	重安	立吟	幾圃	無圃	信端	季吟	安翁	安静	一信	一信	一信	一信	一信	一信	一信	一信	一信	一信	一信	付作者
塵塚	新会	誹諧	大坂	新統	信徳	新統	誹諧	諸国	諸国	諸国	諸国	諸国	諸国	諸国	諸国	諸国	諸国	諸国	諸国	出典
独	集	独	独	独	十	独	独	独	独	独	独	独	独	独	独	独	独	独	独	独

【表2】『後撰犬筑波集』出典資料分布一覽
 【凡例】この表は、『後撰犬筑波集』所収の付合の出典資料一覽である。資料名の略称は次のとおり(△内は採用組数)。
 ○紅梅千句 『紅梅千句』(明暦元年五月刊) △2
 ○統独吟集 『統独吟集』(寛文十二年八月刊) △3
 ○塵塚 『佛諸塵塚』(寛文十二年八月刊) △8
 ○宗因千句 『宗因千句』(延宝元年頃刊) △1
 ○大坂独吟 『大坂独吟集』(延宝三年四月刊) △7
 ○信徳十句 『信徳十句』(延宝三年十一月刊) △14
 ○十会集 『季吟十会集』(寛文末〜延宝四年刊) △7
 ○新統独 『新統独』(寛文十六年九月刊) △4
 ○誹諧独吟集 『誹諧独吟集』(寛文十六年九月刊) △4
 ○新独吟集 『新独吟集』(寛文十二年六月刊) △13
 ○諸国独 『諸国独吟集』(寛文十二年二月刊) △7
 ○蚊柱 『蚊柱百句』(延宝二年刊) △4
 ○新統独吟集 『新統独吟集』(延宝三年八月刊) △17
 ○花千句 『花千句』(延宝三〜四年刊) △13
 ○廿会集 『季吟廿会集』(延宝四年三月刊) △1

である。これを出典とした付合2組は、本書の巻末に近い八十二才に挙げられているが、この前後に『句箱』の連句に出座した者を中心に芝居関係者がにわか集中して出てくるのである。以下のとおりである。

八十才 峰野親房（峰野小ざらし・歌舞伎役者）

八十ウ 富川辰寿（富永平兵衛・狂言作者）

八十一才 田中定方（田中治右衛門・興行関係者）

鶴川生重（大和屋甚兵衛・歌舞伎役者）

ウ 島立花（小島妻之丞・歌舞伎役者）

八十二才 鶴川生重 ↑『句箱』

梅津頓悦（梅津加平次・歌舞伎役者） ↑『句箱』

ウ 富川辰寿

八十三才 小勘重行（小勘太郎次・歌舞伎役者）

ウ 梅津頓悦

乾裕幸氏は、「俳諧狂言説異聞」（『国語国文』昭和42年2月号）のちに補訂を加えて『俳諧師西鶴』昭和54年前田書店刊に収録）のなかで、『句箱』を出典とした句が『二葉集』に2句見られることを指摘し、

『句箱』の付合がおおかた失われているために、この二例しか検出できないのは心残りだけれど、『句箱』と『二葉集』の関係はこれだけでもおおよそ察しがつくというものだろう。

と、明言は避けているものの、芝居関係者の付合が、『句箱』を出典とすることを推察している。筆者も、『句箱』にない峰野小

ざらし以外は、右の箇所における芝居関係者の付合が『句箱』を出典とした可能性はかなり高いと考えている。同時に、乾氏の『西鶴』は『物種集』を編んだのち、あらたに結んだ俳座の付合を、急いで『二葉集』に組み入れたものとみえる（前掲論文）と言う推定にも賛成であり、本書の巻末近い八十丁から八十三丁にかけての範囲が、まずそれに当たるとはならないかと推測する。なお、この範囲以外にも、六十七ウに足代建寿と小勘重行（小勘太郎次）の付合が挙がっている。重行は『句箱』歌仙に出座した歌舞伎役者であるが、道頓堀で興行された座懐紙を出典とする建寿と同じ面に入集しているところから、出典は『句箱』以外の「道頓堀座懐紙」である可能性がある。

編集の進行順序がかならずしも出来上りの丁の順番どおりになつていたとは断定できないが、もし別な丁に振り分けられることなく、八十丁から八十三丁に集中して『句箱』が採用されたのが事実だとしたら、時間をかけた編集からはややかけ離れた編集過程が推測できるのである。

先に『大坂三吟』（以下『三吟』と略す）が七十三才より八十ウに集中して取り上げられていることを指摘したが、この出典についてさらにおもしろいことは、その取り上げる順番である。表1の『三吟』の「典箇所」を追って見てもらいたい。No.107の公木付句を『三吟』巻一の初折ウ七句目より採用してから、No.134の素敬付句を巻三の名折ウ一句目より採用するまで、一度たりとも後退することなく、巻二初折から二の折へ…と連句が進むにした

がつて抜き出しているのである。それは、まるで一冊の俳書『大坂三吟』の丁をめくりながら、もう一方の手で出現する付合を抜き書きしているかのようである。なかでも極端な例を挙げてみよう。『二葉集』七十一才の5組目には、

足さすらする春の婦人

蕙敷袖吹かへす飛鳥風

井筒公木

の付合が見られ、その次に『三吟』を出典とする付合は、七十三才2組目に見える、

一年の間も夢の浮はし

向月に身の来迎を願ふへし

南部素敬

であるが、もともとの『三吟』ではどうかと言うと、

足さすらする春の婦人

敬

蕙敷袖吹かへす飛鳥風

木

一年の間も夢の浮橋

友

向月に身の来迎をねかふへし 敬(以上巻一・初ウ六く九)

と言う具合に四句続きになっている。また、七十五ウ5組目には、

女ともあゝら恋しの古しへや

廬山の雨の夜ぬり木履はく 南部素敬

とあり、次の七十六才2組目には、

そゝこしや此草庵を立出て

井筒公木

やす長持の杉の二もと

とあるが、これも、

女ともあゝら恋しの古しへや 木

廬山の雨の夜ぬり木履はく 敬
そゝこしや此草庵を立出て 友

やす長持の杉の二もと 木(以上巻二・三才七く十)

と、四句続きであった。決定的なのは、次の六句続きから公木・益友・素敬の付合二句一組ずつを本書採用の8・9・10番目として切り取っていると言うことである。

はずはふつくる夏の手枕

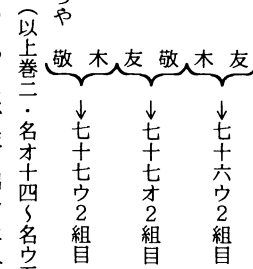
執心の狐小路と聞しより

此土に残つて横堀の石

開き見る抑神代の巻轆轤

俄つふれの常闇の空

かねの儀は今さら何と岩くらや



右のように、『三吟』の採用にあたっては、抜き出した付合を編集しなおすと、言う過程が明らかに省かれており、それ以前に、元の連句から抜き出す時点で省エネ化が計られているのである。

さて、先に述べたように、『二葉集』には、『物種集』に既出の付合が175組あり、これらは三ウからほぼ毎丁にわたって見られるのだが、六十七才を最後に、それ以降『物種集』既出の付合は見られなくなる。表1からもわかるように『大硯』が頻繁に現れるのは、その次の丁の六十八丁からである。すなわち、この六十八才でさきほどの『三吟』ほどではないが、巻二・巻三・巻五・巻六と丁を繰って行く順序でそれぞれ一組ずつ計4組がまとめて採

用されている。この『大硯』からの採用は七十ウまで続き、その次の丁から八十丁まで、右のやや安易にすぎると『三吟』からの採用が続く。そして『句箱』からの採用は（筆者の推定が正しければ）この八十丁から始まっていた。その間しばしば顔を出しているのが『草枕』であり、散逸した下巻をこれに加えると『大硯』以上にこのあたりに頻出していた可能性も高い。両書の付合が多く取り上げられるに至ったのは、このような『二葉集』後半でのやや慌ただしい抜き出し作業のタネ本として使われたためであったと推定している。『大硯』の分布の偏りもここに原因があったのではないだろうか。

少々辻褄合わせのような感みがあるが、どうも『物種集』を時々再録しながら編集していった六十七丁オまでと、それ以降との間に編集上の屈折が感じられるのである。

五、『二葉集』所収の江戸俳人について

江本裕氏は、「西鶴—二葉集の場合—」（前出）の中で、『二葉集』に多くの江戸俳人の付合が入集されている点に注目し、編者の西鶴がどのような情報ルートで彼らを知り得たかについての推定をいくつか挙げている。しかし、『二葉集』と江戸俳人との関係は、氏が述べるほど複雑なものではなく、事はもっと単純であったのではないかと氏は、入集俳人が多く重なることから、岡村不卜撰の発句・付句集『江戸広小路』（延宝六年自序）と『二葉集』

【表3】『二葉集』出典一覽（『江戸広小路』の部）

漢数字は下巻の丁付、算用数字はその面での句番を示す。

No.	簡所	付作者	典簡所
1	3	調不	一オ
2	4	調不	二オ
3	7	露言	三オ
4	4	泰德	四オ
5	11	智風	五オ
6	14	仙風	六オ
7	15	流泉	七オ
8	17	幽山	八オ
9	17	幽山	九オ
10	19	桃青	十オ
11	25	似春	十一オ
12	30	幽山	十二オ
13	27	似春	十三オ
14	31	似春	十四オ
15	31	似春	十五オ
16	32	似春	十六オ
17	33	似春	十七オ
18	33	似春	十八オ
19	34	似春	十九オ
20	34	似春	二十オ
21	38	似春	二十一オ
22	38	似春	二十二オ
23	38	似春	二十三オ
24	38	似春	二十四オ
25	38	似春	二十五オ
26	38	似春	二十六オ
27	38	似春	二十七オ
28	38	似春	二十八オ
29	38	似春	二十九オ
30	38	似春	三十オ
31	38	似春	三十一オ
32	38	似春	三十二オ
33	38	似春	三十三オ
34	38	似春	三十四オ
35	38	似春	三十五オ
36	38	似春	三十六オ
37	38	似春	三十七オ
38	38	似春	三十八オ
39	38	似春	三十九オ
40	38	似春	四十オ
41	38	似春	四十一オ
42	38	似春	四十二オ
43	38	似春	四十三オ
44	38	似春	四十四オ
45	38	似春	四十五オ
46	38	似春	四十六オ
47	38	似春	四十七オ
48	38	似春	四十八オ
49	38	似春	四十九オ
50	38	似春	五十オ
51	38	似春	五十一オ
52	38	似春	五十二オ
53	38	似春	五十三オ
54	38	似春	五十四オ
55	38	似春	五十五オ
56	38	似春	五十六オ
57	38	似春	五十七オ
58	38	似春	五十八オ
59	38	似春	五十九オ
60	38	似春	六十オ
61	38	似春	六十一オ
62	38	似春	六十二オ
63	38	似春	六十三オ
64	38	似春	六十四オ
65	38	似春	六十五オ
66	38	似春	六十六オ
67	38	似春	六十七オ
68	38	似春	六十八オ
69	38	似春	六十九オ
70	38	似春	七十オ
71	38	似春	七十一オ
72	38	似春	七十二オ
73	38	似春	七十三オ
74	38	似春	七十四オ
75	38	似春	七十五オ
76	38	似春	七十六オ
77	38	似春	七十七オ
78	38	似春	七十八オ
79	38	似春	七十九オ
80	38	似春	八十オ
81	38	似春	八十一オ
82	38	似春	八十二オ
83	38	似春	八十三オ
84	38	似春	八十四オ
85	38	似春	八十五オ
86	38	似春	八十六オ
87	38	似春	八十七オ
88	38	似春	八十八オ
89	38	似春	八十九オ
90	38	似春	九十オ
91	38	似春	九十一オ
92	38	似春	九十二オ
93	38	似春	九十三オ
94	38	似春	九十四オ
95	38	似春	九十五オ
96	38	似春	九十六オ
97	38	似春	九十七オ
98	38	似春	九十八オ
99	38	似春	九十九オ
100	38	似春	百オ

との関連濃密であることを指摘しているが、その『江戸広小路』（以下『広小路』と略す）に見られる『二葉集』の付合は合計64組にもぼる（表3参照）。『広小路』所収の俳人が『二葉集』に多く入集しているというよりも、その付合自体が入集しているのである。

そこで、江本氏作成の「二葉集所収江戸俳人一覧」に挙がる「江戸」を冠する俳人37名について検討してみたい。まず、入集組数の最も多い不卜の8組はすべて『広小路』に見られ、卜尺（6）（括弧内は『二葉集』入集の組数、以下同じ）・仙風（5）・流也（3）・兼豊（2）・露言（2）・智風（＝智鳳²）・巖泉（2）・似春（2）・露夕（2）・寸夕（2）・卜由（2）・西水（2）以下、1組入集の14名を合わせた合計26名の付合も、ことごとくこの『広小路』に見られるものであった。つまり『広小路』は、『二葉集』が江戸俳人の付合を採用するにあたって最も有力なタネ本となっていたのである。

問題は、『広小路』では完全に追えない「江戸」を冠した10人の俳人についてである。桃青は、4組のうち『広小路』からは3組であるが、残り1組は千春・信徳と巻いた「わすれ草」三吟歌仙に見られる。この歌仙は、現在『俳諧一葉集』（文政十年）と『俳諧袖珍鈔』（嘉永四年）にしか見られないが、これまでの研究で、原本が確認されていない『仮舞台』（延宝七年三月刊）に所収されていたものと言われている。残る以下の9名は出典がはっきりしない。言水は3組中1組は『広小路』に得られたが2組

が不明。なお、言水自撰『江戸新道』（延宝六年八月刊）にも同『江戸蛇之舂』（延宝七年五月刊）にも見られない。信章は4組中2組は『草枕』にあり、不明の2組はいずれも『物種集』から再録したものである。泰徳は5組中2組は『広小路』にあるが3組が不明。幽山は6組中4組は『広小路』にあるが2組不明。残る笑吟（7）・笑受（4）・笑詠（2）・如流（2）・露沾（2）は、すべての付合についてその出典を得ることができなかった。

しかし、下里知足の『誹諧名簿』（天理図書館綿屋文庫蔵）には、『仮舞台』歌仙の作者11名が記されており、そのなかには『二葉集』に入集しその出典が判明しない以下の作者7名（「江戸」を冠しない2名を含む）が入っている（括弧内は出典不明の組数）。

露沾（2）・幽山（2）・泰徳（3）・言水（2）・如流（2）
京千春（7）・京信徳（1）

出典不明組数の寡少や、俳名に「江戸」を冠すると言う点から、おそらく前半の5名は、『誹諧名簿』に「仮舞台江戸八歌仙」（圈点筆者）と書き留められた『仮舞台』を出典としたものであったのではないか。散逸が惜しまれる。

まったく推定の余地がないのは、笑吟・笑受・笑詠の残り3名である。江本氏作成の先の一覧にもあるように、『坂東太郎』（才丸編・延宝七年十二月序）に笑詠が発句1句、『俳諧向之岡』（不卜編・延宝八年刊）に笑吟と笑詠がそれぞれ発句2句・7句入集するものの、彼らは『二葉集』以前の俳書にはまったく見られない俳人である。一つ補足すると、笑吟と笑詠は、『俳諧金剛砂』（調

和編・延宝末刊)にもそれぞれ発句2句・4句が入集しているが、そのなかに笑受ならぬ笑儒が発句4句入集で見える。笑儒は、『坂東太郎』(発句1)、『俳諧向之岡』(発句12)ほかに入集する俳人であるが音が通じるだけで笑受と同一人物か否かは未詳である。この三名については、結局その出所がわからず、ほかの江戸俳人の付合とは別ルートで入手した可能性があり、同時に彼らを入集した理由が、ほかの江戸俳人とは異なっていた、と推定するにとどめておきたい。

六、『江戸広小路』の採用のされ方について

『二葉集』が付合1組を取り上げた「江戸露耳」は、延宝期のほかの俳書に一切見られないが、『広小路』所収の付合との一致から、本来「露甘」とすべきところを、付合抜き出しにあたった者が読み誤ったにすぎなかったことがわかる。露甘は、『富士石』(調和編・延宝七年四月刊)に「刑部」の肩書で発句4句が入集。ほかにも『坂東太郎』に発句3句、『江戸弁慶』(言水編・延宝八年刊)に発句1句、『誹諧金剛砂』に発句2句が入集する江戸俳人である。「耳」に誤りやすい字体の「甘」は、『広小路』のみならず、右の『坂東太郎』や『江戸弁慶』などの「露甘」や「調甘」にも見られ、延宝期以降の俳書にもしばしば出ており、珍しいことではない。また「甘」と「耳」ではまったく音が違う。このようなミスを考えて、『二葉集』に入集する右の37名の付合を採

用するにあたっては、江戸俳壇に詳しい者の協力を得ることなく行われていた可能性があり、またこれらの付合作者の中には、それまでの西鶴の耳に一度も入ってこなかった俳人もいたにちがいない。また、江本氏が先の一覧の注で指摘するように、『二葉集』が「智風」とするのは「智鳳」のことであり、付合の一致からもこれは確認できる。『二葉集』の「風」はどう見ても「鳳」の略字と取ることはできず、『二葉集』に入集する、ほかの「仙風」「夕風」「外風」「一風」に用いる「風」と字体に何ら変わるところがない。こちらにも「露甘」同様、実際の俳人を知らないゆえのミスであったと思われる。

『広小路』からの採用に特徴的なことは、採用された付合の『広小路』における記載箇所と、それを採用する『二葉集』における記載箇所に見られる。表3の「典箇所」(『広小路』における記載箇所)の欄を横に流して見てゆくと、一才の不トから卅七ウの不トまで、その順序は先の『大坂三吟』のように丁を繰ってゆく順序に沿っている。ただし、○を付した6箇所(丁の前後が見られる。かろうじて採用数最多の不トの2組は何らかの意味がありそうに見えなくもないが、しかしこれらの順序の乱れは特別意味を持ったものではなさそうである。むしろ、『広小路』からの抜き出しに若干の色(編集)を加えた程度のものであったのではないだろうか。次に、表3の「箇所」(『二葉集』における記載箇所)の欄を見てゆくと、「〴」とすべきところは「箇所」(『二葉集』)の欄に複数挙げることを避けているかのようである。先ほどの言い方

で言えば、出典分布の集中がほとんどなく、言い換えれば採用箇所分散化が計られていると言ふことになる。以上のことから、『広小路』からの採用にあたっては、『大坂三吟』ほどの慌ただしさが感じられない。

さて、このような『広小路』からの付合の採用は、表3にも示したとおり『二葉集』の三才から六十七才までである。先に述べたように『物種集』からの再録もこの六十七才を最後に、その後には一切見られない。さらに、六十七丁に改めて注目すると、『物種集』では取り上げなかった『宗因千句』からの採用も、実にこの六十七才で終わり、以下の宗因の付合は別の資料に拠っているのである。このような一致は、先に述べた『二葉集』後半部分の推定が単なる辻褄合わせに終わらないことを語っているように思うのだが、いかがであろうか。

七、六十七丁目才以前とそれ以降

ここまで述べてきたことを、六十七丁才までを仮に前半、六十七丁ウ以降を後半として整理して述べてみたい。

前半では、『物種集』の再録、『宗因千句』からの採用、『江戸広小路』をおもなタネ本とした江戸俳人の入集を特徴とする。すでに見たように『宗因千句』の場合もその採用のされ方に偏りが見られ、『江戸広小路』にしても、ほぼ丁の順番どおりにそのまま取り入れるなど、そこには綿密な編集態度と言ったものは見ら

れないが、『物種集』からの再録の場合はこれとすこし異なるようである。採用される『物種集』の箇所を見ると、一ウ・二才・三才・四才からは一面6組すべてを採用しているなど前半からの採用が多いこと以外は――主要メンバーが占める前半部分から多く採用するのは考えてみれば当然のことかもしれない――、これと言った顕著な特徴は認められず、また、『二葉集』がこれらを取り入れる順番を見ると、『物種集』の二十四ウから始まり、四十ウ・二十九才・三十ウ…、と言った具合に、『物種集』の丁の順番とは何の関わりも持たない。このことから、『物種集』の序文に「此外聞もらせし珍句を追加二葉集にしるし侍る物ならし」と書いた延宝六年十一月の時点、あるいはそれからさほど降らない時点で、西鶴の頭の中にはすでに『物種集』再録の計画があったとも推測できる。また、『広小路』を丁寧に振り分けて配していることから、『広小路』の入手は時期的にそう遅くはなかったかとも考えられよう。もしかすると、江戸の俳人を入集するに至る直接のきっかけは、案外この俳書『江戸広小路』の入手にあったのではないだろうか。

後半は、『大坂三吟』や『句箱』と言った、これまで使用してこなかった資料からの入集が見られ、前集『物種集』では取り上げなかった芝居関係者の付合が目立つ。『大坂三吟』の入手が遅れたか否か、定かではないが、採用の仕方にやや杜撰さが見られ、時間的余裕のようなものが感じられない。後半で頻繁に使われる資料に『大硯』と『草枕』があるが、『大硯』の採用にあ

たつても、杜撰さが見られないこともない。『二葉集』の六十九才には、次のような付合がある。

たいこの口音松の下露

村時雨たといふられてあれはとて 木村三ヶ

前句にある「口音」の意味がわからない。それもそのはずである。

これは、『大硯』所収の三ヶ・西海両吟歌仙の初折ウの十句目と十一句目から抜き出したものだが、『大硯』の方には、

太鼓の響松の下露

三ヶ

村時雨縦ふられてあれは逆

同

とあり、「口音」ではなく「響」になっている。本書にはほかに「響」が、保友・西海の巻頭歌仙名ウ一句目「借錢の夕の鐘や響らん」や、如見・西海歌仙初ウ九句目「入られし祠堂のかねや響らん」にも見られるが、いずれも「郷」を「音」からやや独立した形で崩している。延宝期の大坂の俳書に見られる「響」の例を十点あまり見てみたが、「郷」の部分を書風風に書くのが圧倒的に多く、『大硯』の書体はそう言った意味でも独特なものと言える。『二葉集』が誤って「口音」と読んでしまっても無理なからぬことではあるが、意味の通じない付合をそのまま書出来まで残している点で杜撰の誇りは免れないであろう。『二葉集』後半の編集に時間的ゆとりがなかったと言うのは、右のような例からも感じ取られるのである。

以上のことから、見当はずれの可能性を恐れながらひとつの仮説を試みると、およそ次のようになる。

西鶴は、『二葉集』を編集するにあたって、公刊された俳書からの入集の第一に『物種集』からの再録を考えていた（あるいは後に補うものとして用意していた）。その数およそ200組。そのうち、『江戸広小路』を入手するに至り、江戸の俳人の入集も本書のひとつの軸にしようと考えた。編集途中、何らかの事情から『宗因千句』を大量に取り入れることに考えが至る。『物種集』と『江戸広小路』の付合は当初『二葉集』全体に挙げるつもりでいたが、編集も後半に差しかかって、『大坂三吟』を入手した。また、これまで俳書にはほとんど採用されていなかった歌舞伎役者をはじめとする芝居関係者の入集を思い立つ。そのきっかけは、乾氏が言うように（前掲論文）、『句箱』歌仙の興行であったかもしれないし、あるいは、それが俳書として出版されたことであつたのかもしれない。その時点で、それまでほぼ全丁にわたって採用していた『物種集』と『江戸広小路』からの入集が取りやめとなつた。

右に挙げた仮説はあくまでひとつの仮説（モデル）に過ぎず、表1や表3に見られる出典の分布状況からまったく別な読み方が出てこないとも限らないが、本稿のひとつの到達点として敢えてまとめたものである。

八、おわりに

本稿には、その出典が版本に限ったものであり、出版されな

った懐紙や西鶴の付合手控えなどには当然及んではいけないという限界がある。この付合集のメインは、むしろこれら出版にかからなかった付合の方にあり、そもそも本書を編集・出版する最大の目的は、版本から漏れた「珍句」（『物種集』西鶴序）の付け筋を公に披瀝するところにあつたに違いない。その意味で、一種脇役的な公刊発表済みの付合の出典詮索は、どこまで行つてもその付合集成立の心髄にはたどり着かないと思われるのである。しかし、そのメインの「珍句」の原資料を所見できない現在、出典からのアプローチを今日伝わる版本によつて試みることは、けつして無意味なことではないだろう。出典の洗い出しには遺漏も少なうかと思われるが、本稿により、『二葉集』の編集のほんの一端はうかがうことができたのではないだろうか。

さて、島津忠夫氏は『竹林抄』（新日本古典文学大系49・平成3年11月岩波書店刊）所収の「解説」の中で次のように述べている。

撰集（付合撰集―筆者注）の場合には、原資料を二句の付合の形で切り取り、撰集に収めるに際して、撰者が改作している場合が多い。（中略）前句が原資料の百韻にあつては打越の句との関係で制限があつたものを、撰集ではその必要がなくなり、二句一通の付合だけで考えて前句を改作していることが多い。撰集の解釈にも、そういったこともできるだけ視野に入れておく必要があるといえよう。

これは連歌のことについて述べたものだが、俳諧においても当然

同じことが言え、『二葉集』にも改作がまま見られた。一例を挙げてみよう。四十一ウ四組目には、

丹波口いらぬ金哉すて所

天神かこゑはしたての松 山本西友

の付合が拵がつているが、この出典は『西鶴五百韻』巻頭「何鞠」百韻の三ウ九句目・十句目である。そこには次の形で見える。

丹波口いらぬ銀がなすて所 西花

天神かこゑはしたての月 西友

西友は、三の折の裏十句目という場にあたり、「月」を投げ込んだ。これを、『二葉集』では、「月」を「松」に改めて載せているのである。前句ならぬ付句の改作である。これは、「月花の定座」と言う連句の式目に制限されることがなく、「松」は太夫にも通じ、成句「箸立の松」を用いた方が一句としての座りがよいと判断してのことであろうか。

付合集の成立やその存在意義を求めようとするならば、右のような改作の問題や、付合（とくに版本に出典を追えないような「珍句」）の解釈が必須であるが、本稿ではこれらの内容に立ち入ることができなかった。今後の大きな課題としたい。

註

(1) 『談林俳諧集一』（古典俳文学大系3）所収の「二葉集」で乾裕幸氏は168組とするが、以下の7組がこれに追加できる

（付句のみを挙げる）。

四八二頁上「はしら暦や海土のたま昔 柏一礼」

四八三頁上「やけ出しや富士が煙のなびくらん 岩田西里」

四八四頁中「留守にをく娘も今ははな盛 大須賀胤久」

五〇二頁上「あたま数二十五人の踞供養 夕陽庵道守」

五〇二頁下「唐がさをうつりにけりな徒に 下町百切」

五〇五頁下「腎脉の水の逆まく所をば 西山梅翁」

五〇八頁上「蛇の糞に出る蟹の釣舟 藤原貞因」

(2) 『近世文学資料類従・古俳書編28』(勉誠社刊)所収、加藤定彦氏「宗因千句」解題中の百韻各巻成立年次の考証による。

(3) 柿衛文庫本には原題簽が残るが、ほとんどが剥落して読めない。本文に挙げた角書は、天理図書館編『西鶴』の『二葉集』解説の推読によった。

(4) 東大酒竹文庫蔵。この撰集の刊記には刊行年月が記されていないが、「延宝二寅年五月吉辰」の蘭秀自序を持つために、これまで延宝二年五月刊とされる向きがあった。しかし、所収付合のなかには「延宝三年仲秋下旬」興行の「信徳十百韻」第四が三組見られ、刊行は延宝四年に入ってからのことと思われる。

(5) ここに言う作業行程はあくまで仮に設定してみたものであり、実際はもっと複雑であったかもしれないが、論述の便宜上このような行程を挙げてみた。

(6) 峰野小ざらしは、出典となる『道頓堀花みち』(延宝七年十一月刊)のほか、『太夫桜』(延宝八年四月刊)、『阿蘭陀丸二番船』(同年八月跋)、『西鶴大矢数』(延宝九年四月刊)に「峰野

帆船」の名で見え、『二葉集』の「親房」は替名か俗名であろうと思われる。

(7) 足代建寿は『太夫桜』に「足代ヤ建寿」の名で出ていることや、『道頓堀花みち』『阿蘭陀丸二番船』『西鶴大矢数』入集と言った芝居関係者がたどる入集状況にあることから、道頓堀の芝居茶屋の主人か何かであろう。

(8) 『句箱』も「道頓堀座懐紙」のひとつと考えられるため、改めてこのような表現をとる。

(9) 今栄蔵氏「桃青ら「わすれ草」歌仙の制作年次」(『国語国文』昭和33年8月)など。

(10) 『近世文学資料類従・古俳書編29』(勉誠社刊)所収「大坂三吟」解題で、雲英末雄氏は、『大坂三吟』の刊行時期について、本書が同じ書肆寺田重徳から刊行された『江戸三吟』(延宝六年三月刊)、『京三吟』(同年八月刊)の形式をそっくり踏襲していることなどから、「延宝六年後半の刊行といちおう推定しておきたい」としている。右の説に従えば、『二葉集』での採用がなぜ後半まで見られず、前述したような慌ただしい採用の仕方となっているのか、疑問が残る。

(11) 『大観』については原本(版本)の存在を知らない。よって天理図書館綿屋文庫所蔵の版本写しによった。

(まっざわ・まさき 早稲田大学演劇博物館助手)